

---

# ラッキーな少年の物語

カマボコ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ラッキーな少年の物語

### 【Nコード】

N0687Y

### 【作者名】

カマボコ

### 【あらすじ】

運がいい少年は奇妙で気持ち悪い存在だった。少年がニヤニヤと気持ち悪い笑みを浮かべる、そんな物語

【運が良くなりたい】

人間なら誰しもそんな事を考えるだろう。なら、運がいい人間はどう考えるのだろうか？ 運が悪くなりたい？ 運が良くなりたい？ たぶん後者が正しいだろう。運の価値なんて本人にはわからないのだから

×

「ふむ つまり、キミのスパイクを切り刻んだ犯人を捜せばいいんだね。俺が解決してあげようか？ 生徒会長には言いにくいんだろう？」

何処か不思議な雰囲気とする少年は胡散臭い笑みを浮かべ、少女に言った。

「……………本当に見つけてくれるの？」

普通な少女は不安気に少年に聞き返した。

「大丈夫だよ。金があれば何でもできるんだ。こんな問題、簡単に解決できるよ」

少年はニヤニヤと気味の悪い笑みを浮かべた。

×

少女と少年の出会いはいっさいさっきの事だった

「……………」

普通の少女は下を向き、とぼとぼと廊下を歩いている。手には一枚の封筒、背中には哀愁が漂っている。

少女の目的はスパイクを切り刻んだ犯人を捜す為、生徒会室に向かっているのだ。何故、生徒会室に向かっているのかというと、現生徒会長が行った『目安箱』に投書しに行く途中なのだ。

生徒会長への信頼は確実なモノではないが、支持率98パーセントを叩き出した生徒会長のカリスマ性を頼ったのだ。二十四時間三百六十五日、依頼を受け付けると豪語した点で少女は生徒会長へ悩みを打ち明ける事を誓ったのだ。

ここの角を曲がれば目安箱の場所……と思い、角を曲がると

「ああ　これが目安箱か……　これを隠したら生徒会長はどのような反応をするのかな？　俺を更生させるのかな？　それはそれで面白そうだな」

はははと普通に笑っている様に見えるのだが、何故か気味の悪い不思議な笑みを浮かべた。笑っていた人物は黒と茶色が混ざった不自然な色をした、少し長い髪の少年だった。

少女はこんな変わった髪色の少年が学園にいたのか考えたが、もっと変わり種な髪の生徒が多かった事を思い出した。寧ろ、少年は地味な方だったのだが、何故か目立つのだ。

生徒会長の様に完璧で完全が故に目立つのではなく、何か、生

徒会長をも越える得体の知れない何かを隠しているように見えた。

「ん？ 事件の匂いとスポーツドリンクの甘い香りがするぞ？」

どちらも少女から漂っているモノだった。

「ああ、キミの匂いか。 スポーツドリンクが飲みたくなるよ。 帰りに買おうかな？ 砂糖二袋と一緒に」

少年はポケットから板チョコレートを取り出し、バリバリとかじり始めた。 急いで少女は風紀委員がいなか確認した。 いなかった事に安心してホッとする。

「ん？ 風紀委員の事なら大丈夫だよ。 どうせ諦めるから」

少年はそう言うのだが、どうせ嘘っぱちだろうと思った少女は慌てて少年から板チョコレートを取り上げた。

「ぬおっ！ 何すんだ同級生！ 俺の楽しみを奪いやがって！」

少年は玩具を取り上げられた子供のように怒った。

「同級生？」

少女の疑問が無意識的に口から出た。

「ん？ キミは二年生だろ？ だって、その首に掛けてるタオル。 それは二年生の陸上大会の参加者のみに与えられるモノだろう？ ほら、年月も合ってる」

少年が言った通り、少女のタオルは二年生達しか持っていないモノだった。　　だが、このタオルを貰ったのは一昨日の事だ。  
一般の生徒ならわかる訳ない。　　一般なら。

「キミの悩みを解決してあげようか？　　お代は金で買えるモノでいいよ」

少年のニヤニヤとした胡散臭い笑みが少女には希望に見えた。

×

「ふむ　　あの人が犯人か……」

少年は一人の陸上部員を見て呟いた。　　陸上部員の名は諫早、三年生。　　少年は彼女がスパイクを切り刻んだ犯人だと彼なりの手段で確信したのだ。

少年は彼女に近づき、声を掛ける。

「あのー、すみません。　　このスパイクに見覚えありませんか？」

少年は手に持っていた切り刻まれたスパイクを見せ付けた。　　少年の表情は人を不愉快にさせるような胡散臭い笑みだった。

「　　しっ……知らない!!」

諫早は少年のスパイクに驚き、一目散に走り去っていった。

「あつ、逃げられた……　　別に伺っただけで犯人だなんて言ってな

いのになあ。これじゃあ、自分から犯人ですって言ってるようじゃないか。犯人失格だな。まあ、逃がさないけど」

少年は自分が持っていたスパイクの片方を諫早目掛けて投げた。少年がのんびりとしてる間に諫早との距離はグラウンドの端から端ぐらい。普通は届くはず無い。普通なら。

少年の投げたスパイクは諫早の方向を大きくズレ、陸上のラインへと落ちた。

そのスパイクは陸上部の足に当たり、蹴り上げられた。スパイクは宙を舞い、ゆっくりと落ちていく。そしてスパイクはサッカーボールと重なった。

サッカーボールごと蹴られたスパイクは勢いよく飛んでいき、

諫早の足に当たった。諫早は衝撃でバランスを崩し、

「ぐにゃ!？」

前に倒れこんだ。

×

「諫早先輩、どうして逃げ出したんですか？俺はこのスパイクに見覚えがあるか伺っただけですよ？自分の履いているスパイクと同じやつだ、とかでもいいんですけど」

少年はいつものように気分を害すような人を不安定にさせる笑みで諫早を追い詰める。

「どっ……どうして私が犯人だってわかったの？」

諫早が不思議そうに訊ねる。

「簡単ですよ。      お金を使いました」

「おっ……お金？」

「そうです。      お金です。      あなたの証拠の全てをお金で買い取りました。      陸上部で怪しい行動を取っていた三年生、それもレギュラーから外された人。      普通はこれだけでは解決出来ません。

まあ、生徒会長のような超人なら出来るんでしょうけど……

まあ、凡人の俺では不可能な犯人探しです。      なので、箱庭学園について一番知っているであろう人物に聞いてみると、なんと、目撃したそうです。

証拠の写真も貰いました。      これです」

少年は右ポケットから二十枚程の写真を見せた。

「『彼女』<sup>いわく</sup>曰、三百枚程度違う角度から取った写真があるそうなので二十枚程度買いました。      それでこの写真に写っているのは誰何でしょうね？」

少年は持っていた写真をばらまいた。      その写真には依頼主の少女のロッカーを開ける諫早やスパイクをハサミで切り刻む諫早が写っていた。

「……………」

諫早は啞然とした。

証拠が有りすぎて反論も何も出来ない彼



女は脳から何か口に出来る言葉を探しているのだ。      所謂、パニ  
ック状態だ。

「あなたも運が悪いですね。      もし、依頼主が俺に出会わなければここまで問い詰められる事もなかったでしょうに。      生徒会長が面白くもない解決策を生み出して、台本通りに終わってたのでしようけど、俺は徹底的に異常事態アドリフですから、何仕出かすかわからないモノでしてね」

少年はいつもとは違い、純粋な笑顔で諫早を見る。      少年の笑顔は純粋な筈なのにいつもより薄気味悪く感じた。

「うわっ……」

諫早はあまりの不自然かつ奇妙な笑顔に、つい、口から声が漏れてしまった。

「うーむ、やはり不自然な笑顔になってしまふな……      まあ、いか。      では先輩、俺はこの辺で」

少年は固まったままの諫早を置いて立ち去ろうとした。

「      待つて！」

やっと脳が追い付いてきた諫早は少年を呼び止めた。

「何ですか？」

少年は振り返らずに訊ねる。

「わっ……私はどうす」「簡単です。被害者に直接、心を込めて謝ればいいんです」

少年は諫早の言葉を遮る。

「六時に二年十三組に来てください」

少年は後姿からでもわかる程、笑っていた。

×

ガラツと教室のドアが開いた。

「失礼しまーす……」

諫早だ。諫早は二年十三組の教室のドアを開け、電気も点いていない真っ暗教室に入った。

「六時ジャスト、集合時間の十分前には集合するのがマナーですよ先輩」

教卓に座っていた人物が諫早に話しかけた。例の少年だ。少年はニヤニヤと諫早を嘲笑うかのような笑みを見せる。外は曇っている為暗く、教室の電気も点いていないのに少年は何故が目立っていた。

「えーと……」「ああ、俺の名前は『財宝』ですよ先輩」「どうして私の言いたい事がわかるのかな……」「先輩程顔に出る人間はいないでしょうね」「むう……」

相変わらずニヤニヤと人を馬鹿にした様な笑みで諫早をからかう財宝。 諫早は財宝を無視して被害者の少女を目で探す。

「ああ、先輩。      あの子はいませんよ。      この事を知りませんから」

少年は諫早の焦点を自分だけに集めた。

「えっ？      …… 来ないの!？」

「はい、先輩が犯人だという事も聞いてませんよ」

「じゃあ……何の為に……」

「先輩に被害者がどのように苦しみ、どのような状態にまで陥ったか、たつぷり話しましょう。      時間はまだまだありますから」

財宝は楽しそうに笑った。

一時間程度、財宝は少女の話をした。

財宝は大袈裟に曖昧に、そして苦しそうに少女の話をした。

財宝は終始笑顔だった。

×

「……………」

諫早は黙ってしまった。主な原因は少女への謝罪を考えて下さい、と極悪人の笑みではなく、普通の有り触れた笑顔で言われたからだ。財宝の普通の笑顔は何か気持ち悪く、胸を突き刺すかのような感覚に陥ってしまう気色悪い笑顔だった。まるで悪人が善人のふりをしているかのような不自然さが自分の精神を痛めつけるのだ。

財宝の言葉が重くなり、一つ一つ積み重なっていく。たった一度の行為で心が折れそうになる。財宝の言葉に従わないと痛みが増すようになる。なので、今の諫早は少女への罪悪感しか溜まらない。

そんな諫早を見て、財宝は……楽しみを得た子供のようにニヤニヤと笑っていた。全て財宝の計画通りで思惑通りなのだ。時計を二三度確認する。そろそろだ、と財宝は嬉しそうに呟いた。

時計の針は七時を指す。同時に教室のドアが開いた。被害者である少女が教室に入ってきた。財宝は諫早の肩を叩き、囁く。

「来ましたよ」 財宝がそう囁くと諫早は目にも止まらぬ速さで少女の目の前に立つ。

「……………ごめんなさいっ!!」

諫早が謝ると同時に膝が地面に付く、罪悪感から開放されて緊張が解けたからだろう。諫早は一言言つと何も言わずに立ち上がり、走り去っていった。

「七時ジャスト、集合時間の十分前には集合するのがマナーだよ。『有明ちゃん』」

財宝は声を張り上げて言った。

×

「つまり、『諫早先輩が犯人だった』ってこと？ 『財宝くん』」

「まあ、そういう事だね。『悪意百パーセントでやったんだと』それでどうするんだ？ 『許すのか？』」

財宝は無表情で有明に訊ねる。

「『許す』それが私の出した答えだよ。今までの私なら絶対に許さなかったと思う。だけどキミを見たらそんな事で怒ってた私がちつぽけに見えちゃって……嘘を混ぜたり、大袈裟に言ったり、全部私の反応を見たかっただよな？ プラスに転ぶかマイナスに転ぶかを。それに財宝くん、キミのその人間が最も嫌う非道で卑怯な性格。いや、人格。まるで『お宝を人から遠ざけているような』」

「『はっ……』」「えっ？」

「あははははっ！！ いやいや、こんなにも俺を推測した人間は始めてだよ有明ちゃん。一日も経たずに俺の半分以上を解き明かされたね。あの『生徒会長<sup>めだかちゃん</sup>』よりも凄いいんじゃないかな？ 凄いに決まってるよ！ キミは才能の塊のような人間だね！ ああ、生徒会長には持てない才能だよ。普通の才能。生徒会長のように決まった勝利じゃない。台本にはない異常な行動が出来る才能だ！ まさかこんな人物がいるなんて……流石、箱庭学園と言ったところかな？ 俺もラッキーだなあ」

財宝は楽しそうに、高らかに笑うのだった。

×

「……不知火、今日は一段と食ってないか？」

「ああ、今日はいいんだよ　『ラッキーだったし』」

「はあ？」

少年は首を傾げた。

ヒトガタが言葉を発する。

「×××××！ ×××カネ×××！」

『カネ』とだけハッキリと聞こえた。 ヒトガタは俺に触れようとする。 だが、俺には触れられなかった。

【害を成すモノだったからだ】

×

音楽室に二人の生徒がいた。 一人は異質で不気味な雰囲気がある近寄りがたい少年、もう一人は何処にでもいそうな一般的な少女。 少年、財宝はニヤニヤと人が嫌いそうな笑みを見せると、ピアノの前に行き、座った。

「うん           折角<sup>せうかく</sup>だし一曲弾こうかな？」

少しワクワクしながらそう言った。

「えっ？ 財宝クンってピアノ弾けるの？」

「一応な。 唯、不愉快な音階が耳障<sup>みわ</sup>りだと言われたけどね。 だ  
から聴かない方がいいよ有明ちゃん」

財宝は耳を塞<sup>ふさ</sup>ぐそぶりを見せる。

「いや、聴いてみたいな」

少女、有明は財宝に近付き、ピアノを眺めた。

「……まあ、好き勝手に弾こうか」

財宝は何故か少し躊躇ためらいながらも鍵盤に手をやる。指が鍵盤に触れた。

「うわああ!？」

有明は耳を塞いだ。えげつない程酷く適当な音ではなく、耳障りに近い不協和音のような気が狂いそうな音だった。発泡スチロールを擦ったような、耳元に蚊が近づいたような、不快の極みのような、人間の気分を害する為に作られた音だった。よくこんな世紀末みたいな音を作れるなと思いつながら必死に耳を塞ぐ。汚くはないのだが精神を引き剥がされるように痛々しい音が脳を狂わせるのだ。

さらに、音楽室の壁が風化していた為、音が廊下に響いていた。

昼休みである今、音楽室前の廊下を渡る生徒も少なからずいる。

幸いこの棟を使う者が少なかったのだが……音楽室付近にいた生徒達が頭を抱え、苦しんでいた。別に肉体的ダメージというものはないが、今までに体験した不幸な記憶などが頭によぎり、気持ち悪くなる。さらに音が不快かつ奇妙な音階で音が続いている事自体不思議な音が鼓膜を刺激し、不安定なもやもやとした気持ちになるのだ。中には苦しさの余りに嘔吐する者もいた。

だが、財宝はそんな事はお構いなしにピアノを引き続ける。



「ストップオオウプツ！！ やめて！ 止めて！ ストップ財宝ク  
ンー！！」

有明がピアノに熱中している財宝の耳元に近づき、精一杯叫んだ。

「……………ん？ ああ、有明ちゃん。 どうしてそんなに取り乱し  
てるんだ？」

財宝は頭にクエスチョンマークを浮かべて首を傾げる。 有明は  
怒りマークを浮かべて財宝を睨んだ。

×

「俺は子供の頃から放送部に入るのが夢だったんだよ」

財宝はニヤニヤと笑いながら放送室の鍵を開ける。

「……………どこで手に入れたのそんなもの」

財宝の手にはマスターキーが握ってあった。

「金で買えないものは無いんだよ有明ちゃん」

ニヤニヤいつもの様に笑いながら放送室のドアを開けた。

×

「おおっ、これで放送が出来るのか」

財宝は放送用のマイクを見て言った。目はキラキラと子供のように輝いている。

「財宝くん、やめといた方が」「あー、あー、マイクのテスト中」  
「遅かったか……」

有明が財宝を止めようとしたのだが、財宝はすでにマイクのスイッチをオンにしていた。

「あー、全校生徒の皆様、こんにちば。俺は二年十三組の財宝と言うモノです。どうして一般の生徒である俺が放送しているのかというと、皆さんの力になりたいからです。力になるとはそのままの意味なのですが、天邪鬼<sup>あまのじやく</sup>なヒトもいるでしょうし、詳しく説明しましょう。何か悩み事があったら生徒会長ではなく、俺に相談してください。そうすれば確実に解決できます。ここまでは生徒会長と同じでしょう。でも、ここからは違います。何でも相談可能です。例えば…… Aさんがム力つくから変死させてほしいとかテストを満点にしてほしいなどなど、子供なら誰もが考えそうな狂気染みた相談まで受け付けます。しかも報酬は入りません。俺はヒトの喜ぶ顔が好きなので一般入ですから。そんな夢や希望のある生徒は二年十三組まで。以上」

財宝は楽しそうにマイクのスイッチを切った。

「……………うわぁ」

有明は驚きと不安な気持ちでいっぱいになった。唯、今の財宝を見て、少しの発見があった。この人は子供の残酷さが残ったまま成長した人だと。

×

「うーん、誰も来ない……」

財宝は二年十三組で待機していたのだが、財宝を頼りに相談する人物は一人もいなかった。

「全部、生徒会長めだかちゃんの影響か！……面白くないな」

はあ……とため息を吐いた。ちなみに有明は部活に行き、現在、一人ポツンと教室で待っているのだ。

誰も来ないなと思ったその時、教室のドアが開いた。財宝は相談者では無いことを知っていた為、気だるそうにため息を吐くのだった。

「『財宝』と聞いてもしやと思ったら……やはり貴様だったのか財宝……」

生徒会長のめだか率いる生徒会の全員が教室に入ってきた。

「久しぶりだけど……相変わらずキミは面白くないね。無機物のロボットのようだ。行動パターンも何もかもが台本どおりで、決められた人生を歩んでヒトを愛して死ぬんだろうな」

財宝はニヤニヤと笑わずにぶつきら棒に言葉を吐いた。

「めだかちゃん……コイツは……」

生徒会の庶務の人吉善吉がめだかに君の悪い少年について訊ねた。

「『財宝』 苗字は名乗らないから聞いたことがないのだが名前だけは知ってるぞ。 何処か『球磨川』に似た気持ち悪さがあるから異常だとは思っていたが……まさか十三組にいるとはな。 流石に気がつかなかったぞ。 財宝二年生、貴様がかつて心優しい少年だったことは知っている。 何か不幸があつて性格が捻じ曲がつてしまったのだろう……だから私が更生させてやろう！ 完全にな！」

めだかが上から目線で財宝に言った。

「どーでもいいー、まあ、一つ言えることは『俺が不幸になるわけないじゃないか』」

財宝はいつものニヤニヤ顔に戻り、窓を叩き割った。

「……っ！？ 逃がさんぞ！」

めだかは財宝の行動を判断して、財宝を捕まえようと前進したのだが、

奇跡的に足元にレンガがあり、偶然、それに躓き、

「うおっ！！」

完璧超人である生徒会長がこけた。 しかも落下点には横たわった机、その机がめだかに当たる目と鼻の先で、

「うらあああ！！」

善吉がめだかを支えた。まさに間一髪の所だった。

「……ははは！ 善吉キミの方が面白そうだ！ その主人公より面白いよ。これだけでも今日の成果は有ったかな？ ラッキーだね」

そう笑つと財宝は二階から飛び降りた。

めだか達は慌てて外を見る。

財宝が飛び降りた先には陸上部のマットがあり、そのマットに飛び込んだ。無傷では済まない筈なのに何事もなかったかのように立ち上がり、そのまま走って逃げてしまった。

「何者だよあいつ……」

善吉は逃げていく財宝を見つめながら呟いた。

## 2（後書き）

感想、誤字などがありましたら感想に書いていただくと嬉しいです。

### 3 (前書き)

最初だけ一人称

「つまり、財宝クンにはフラスコ計画の十四番目ウラカタをしてもらいたいのです」

理事長が89032793jjふえsえ。

「十四番目ですか……十三人を確認しましたが十分じゃないですか？ 核爆弾でも落とされない限り……」

俺がさdふえgれwrgv gwdwあsdじdさdwでふえ  
fwqfqふあsf。

「生徒会長が敵なんですよ」

「降参した方がいいんじゃないですか？」

俺は『dfhufvpdふあんsvbvndfじゅbどちs』と  
思った。

x

「いやいや、それだけの理由で」 「十分な理由です。 核爆  
弾よりも恐ろしいじゃないですか」

財宝はいつものようにニヤニヤと笑わずに真剣な顔だった。 理  
事長はそれに気づき、問う。



「どうしてあなた程の人間が彼女を恐れるのですか？ あなたのその『福作用』<sup>ブラックラック</sup>なら絶対に攻撃されないのに……」

「俺の異常は戦う為にあるんじゃないんです。ご褒美のようなモノですかね？ 宝探しの宝のような役割です。不公平さと例外を身に着けたものにしか手に入らない……ね」

財宝はいつものようにニヤニヤと人を見下すかのような笑みを浮かべた。

「それに、俺は彼女が怖いんです。その異常さが怖くて恐ろしいんです。決められた人生を歩むのを楽しんでいる。それが怖い。それに他人の人生までも左右させてしまう所ですかね。人吉善吉くんが一番の被害を受けているでしょう。予言しましょう、彼はいつか生徒会長に捨てられます。決められて、なお、人生を棒に振る破目になるでしょう。まあ、いつか解決させるでしょうけど」

財宝は無表情で語った。興味が無さそうに。

「……では、あなたは関わらないでください」「えっ！？」

財宝はニヤニヤといつもより歪んだ笑みを見せた。凄く嬉しそうに、笑うのだった。

「たとえば、俺が嫌いな人物でも危険人物でも最悪な人物でも、俺は妨害します。それが負け戦でも価値が確定していても俺は妨害するでしょう。俺は他人に迷惑を掛けるのが好きなだけですから」

理事長は財宝の気持ち悪さを改めて思い知る。人間の憎悪と邪悪さを一緒にした、正に、悪人だ。自分が味方でよかったなどという気持ちもない。いつ裏切るかさえわからない、汚れすぎて寧ろ、眩しすぎる。兎に角、理事長は仲間に出来た喜び以上に、後悔があった。

「一応、言っておきますけどあなたは黒神めだかを倒すのではなく、フラスコ計画を完成させるのを手助けする十四番目ウラカタなのです。決して、十三組の十三人の邪魔にならないよう！」

「わかりませんよ？ 自分の行動すら読めませんし」

あはは、と笑う財宝を尻目に、理事長の財宝への恐怖は積もるばかりだった。

×

「うわあゝゝひつまだあゝゝ」

「と言いつつ何普通に生徒会室入ってるんだよお前！」

現在、財宝は何故か生徒会室にいる。どうして？ と聞けば、適当 と答えるだろう。本当に理由も無く自然に入ったのだ。

「……めだかさんがいない今生徒会を潰しにきたのか？」

金髪の長い髪の男、阿久根高貴が構えながら財宝に恐る恐る訊いた。

「んんん？ べつにゝ、そんな面倒な理由もないよゝ。暇つぶ

しだよ暇つぶし、友達がいなほつちな俺をかまってやってくれよ。俺だって生徒会長の敵なんてポジションなんてやだよ。皆友達だよ、友達。だから仲良くしようぜお三方？」

財宝はいつものようにニヤニヤと笑うのだが、気持ち悪さは無かった。そして彼が凄く眩しく思えた。

「いやいやいや！？ きゃら崩壊ってレベルじゃないよね！？ もう別人の域だよね！？ 作戦？ 油断させておいて隙をみせたら討つ！とか」

生徒会会計の喜界島もがなは財宝ののほほんとした姿を見て、取り乱した。

現在、生徒会長の黒神めだかは仕事の為いない。めだかを嫌がっていた財宝を見ていた生徒会メンバーはめだかのいない生徒会を狙って此処に来たのかと疑っているのだ。

勿論、財宝にそんな気は全くない。喋り相手欲しさなのだ。

「討つ！ って言われてもね。俺は別にさいきよくってわけでもないし、てんさいよくってわけでもないからね。唯、ちよつと運がいいだけだし、倒すのなら倒せばいいじゃないか。俺は抵抗しないよ」

「……まあ、ここはお前を信じよう」

「人吉くん！」

人吉の判断に驚く二人、それを見た財宝はニヤニヤと笑った。

「コイツからは戦う気力が感じられない。もう元からないみたいだし、今日ぐらいはいいんじゃない」 「甘い物食べたい」 「えっ？」

「甘い物が食べたい。でも今は持っていない。なら買いに行かなくちゃならない。なら此处から出て行かなきゃならない。わあ！ 急がないと！」

財宝は猛ダッシュで生徒会室を飛び出し、走り去っていった。

「……何で来たんだよ！！」

生徒会一同が一つになった瞬間だった。

「ふもふも　つまり、生徒会と戯<sup>たわむ</sup>れる間は何もするなという事かい？　ふもふも。でもでも、俺もそんな真剣勝負を邪魔したくなっちゃう性質<sup>たち</sup>なんだよね。ふもふも。人間の汚点を集結させたら俺になるらしいぜ？　ふもふも」

財宝はお菓子をふもふもと食べながら聞き返した。

「黙ってここに閉じこもってお菓子でも食つとけ！　はあ……どうして俺が不要物を用意するんだよ……」

明らかに高校生には見えない背丈の少年はため息を吐き、自分より背丈の高い平均的な生徒達を使い、両手が塞がる程いっぱいのお菓子を運んでくる。それを繰り返し、二年十三組の教室はお菓子で埋め尽くされてしまった。

「わーい、天国みたいだね。はっぴーはっぴー」

あははーと幸せそうな顔で財宝が言った。

「ぶん殴りてえ……」

少年、雲仙冥利<sup>うんぜんみょうり</sup>は改めて財宝が嫌な人間だと思い知らされた。経済的な意味で。

×

放課後、現在、学年一嫌われているであろう人物が居座っている

二年十三組のドアが開いた。

「こんにちはー」

有明だ。今日は陸上部が休みな為、友人の財宝の所へ遊びにきたのだ。

「　　ってなんじゃこりゃあああ!？」

有明の声は静かな廊下に良く響いた。

×

「何なのこのお菓子の山は!」

有明はお菓子の山のとっぺんに寝転がっている人物に向けて叫んだ。

「ん? ああ、久しぶりだね有明ちゃん。俺は今仕方なく大人しくしているんだ」

「教室をお菓子で埋め尽くす事を大人しくとは言わないよ!」

「まあ、俺にも色々あるのさ。　これが仕事ってやつ? いや、寧ろライオンの餌付けに近いね。　迷惑掛けないように餌に気をとらせておく的な?」

財宝はいつものように酷く憎悪が乱れた笑みを見せる。　相変わらずのようだ。

「いやいやいや！ 全然わかんないよ全然！」

「俺みたいになればわかるぜ？」

お菓子を貪りながら厭らしい笑みを見せる財宝。 この喋っている間にもお菓子を食べ続けており、山のように積みあがっていたお菓子が丘のように平らになっていった。

「その貧弱そうな体の何処に入るの……」

「甘い物は別腹と言うじゃないか」

「そんな意味じゃないよ！」

財宝は相変わらずのようだった。

×

「 腹八分目ってやつだね」

財宝は一時間ちよつとで山のように積みあがっていたお菓子を食べ尽くしてしまった。 僅か一時間ちよつとでだ。 化け物のようだ。 それでいてまだ腹八分目と抜かすのだ。 恐ろしい人物だ。

「これを人間の神秘って言うのかな？ ……財宝クンなら普通だと思ってしまう私が怖い……」

慣れって怖い……と思っている有明だった。 その間に財宝が教室を出て行く事に気づかない程凹んでいたのだろう。

x

「さくさく　お腹も満たされたから遊びに着ただけ……  
もう終わりそうだね。冥利君にはもつと粘って欲しかったな！。  
こつ、めだかちゃんがちよつと苦戦してるぐらいにね。そこで  
俺が登場して台無しにするのさ。バトルなんて無かったって感じ  
に」

「……結論だけ聞こうか」

「邪魔したいです」

「聞いた私が馬鹿だったよ……」

はあ、とため息を吐く生徒会長こと黒神めだか。　現在、風紀委員  
長である雲仙冥利と戦い、勝ったものの自らを守らない戦い方を  
した為、傷だらけで動けないほどだ。　今は善吉におぶってもらっ  
ている。

「完璧超人のめだかちゃんが馬鹿だったら俺なんかプランクトン以  
下だよ。それよりそれより、キミが冥利君を倒したせいで面倒な  
ことになるよ？　暫くすると異常者達が学校で大暴れ！　とか展開  
？　まあ、俺には関係ないけどね。　ああ、言うつもりなんてプラ  
ンクトン並みに無かったのについ口が滑っちゃったよ」

わははと無理に作った笑顔で笑う財宝。　生徒会一同は財宝の発  
言に驚いた。

「異常者……まさか！　十三組が！？」



「たぶんそうなると思うね。曖昧でごめんね。俺の憶測だし、口止めされてるしね」

財宝は指でバツマークを作り、口にあてた。その腑抜けた行動が人をいらつかせるには最適だった。

「落ち着け私落ち着け私落ち着け私……こいつにム力ついている暇なんて無いんだ……ふう、ままままあ、貴様がそ、そう言うならし、仕方ないな！」

「ん？ どうしてそんな顔するんだい？ 俺は情報提供してあげたいい人なのになー。そんな顔すると俺が悪いみたいじゃないか。全く、人の気持ちつてもんを考えてくれよな」

「善吉……一発ぐらいならぶん殴っても」「駄目！」

財宝は相変わらずだった。

×

あれから何週間が過ぎ、財宝はというと……

「ん？ 何だか俺と似たような奴が……いや、違うか間逆って感じ？ 俺が正義ならキミが悪かな？ いやいやいや、俺が正義なわけないね。寧ろ、悪の根源ってやつかな？ じゃあ、キミは何なのかな？」

「『キミが悪？』『あはは』『ないないありえないね』『悪でも正義でもないじゃないか』『そして悪の敵であり、正義の敵でもあるのさ』『全ての敵ってやつ』『だからキミは正義にもなれな

いし悪にもなれない』『傍観者さ』

何処か気持ち悪い雰囲気とする学ランの少年とニヤニヤと悪の親玉のような笑みを見せる少年はお互いについて語っていた。

「へー、どうでもいいけど一つ言いたいことがあるんだ」

「『ふーん』『どうでもいいけど』『一つ言いたいことがあるんだ』」

二人は声を揃えて言う。

「俺は」「僕は」

「キミが大嫌いだ」「キミが大嫌いだ」

そう言うと二人の少年は気味悪く笑い、別方向に歩いていくのだ。  
った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0687y/>

---

ラッキーな少年の物語

2011年11月17日21時39分発行